

「^{クレド}信仰宣言」

のカテケーシス

(Ⅲ) 「父のひとり子……」

主イエズス・

キリストを信じる」 (2)

竹山昭

前回は、イエズス・キリストに関するこの項を「イエズスを誰だと言うか」という根本的な問いに対する応答という観点から、全般的に扱った。全般的には言っても「復活し、父の右におられる」の句にはあまり触れなかった。そこで今回は、「受肉」に関して若干のことを述べ、十字架の死の意味を簡単にふり返り、復活を正しく受け取るためにいくつかのことを述べておきたい。

一、受肉の神秘をめぐって

「受肉の神秘」は通常、「神が人となったことだ」とか「神のおん子が真の人間となったことだ」とか表現される。しかし、より正確に言えば「父のひとり子がナザレのイエズスという具体的なひとり人間となった」と言わなければならぬまい。

ヨハネはあの有名な『みことば賛歌』で、「そしてみことばは肉となり、わたしたちのうちに宿った」と表現している。聖書が「肉」という表現を用いるときは、おおむね、「みじめさ、もろさ、弱さ、平凡さなどの観点のもとでの人間」を意味しているという。ヨハネのこの表現でも同じ意味合いである。だから「わたしたち人間存在の中へ、その日常の平凡さ、行きづまり、むなしさに至るまで」みことばが立ち入った、ということになる。

しかし、それは「だから人間というもののすべてが救いのしるしである」とか、「人間の本性そのものが神の世界に高められた」とかいうことではない。ヨハネも、またわたしたちの信仰も、「ナザレのイエズス、この一人の人間において神はわたしたちとともにある方とされた」ことを意味している。父のひとり子は、歴史上の一定の所と一定の時期に、ナザレのイエズスという具体的なひとり人間として人間の条件のうちに生まれ、生き、殺されていったあの人間とされた、という意味である。

なぜ、それがそんなに重要かといえば、それは同時に、神がわたしたちにご自分をさし出されたのは、ナザレのイエズス以外の人間や人間本性自体においてではない、との批判的意味を併せもつからである(W・カスパー参照)。

《素顔の神》

数年前、一人の神父さんから質問を受けたことがある。

「よくわからないのだが、おん父の顔ってどんなイメージになるのだろう。イエズスの顔っていうか、イメージはまあ福音書を読んでみると僕なりにもてる。しかし、おん父の顔はどう描けばいいのか、よくわからない」、そんな内容の質問であった。その時に答えた言葉を正確に覚えているわけではない。ただ、「おん父は目に見えないから私にも描け

ません。しかし、イエズスの顔なりイメージと同じだと思えます。イエズスを眺めるときそこに同時におん父を見ている、そう信じるほかに方法はないと思います」という意味合いの返事をしたと記憶している。実は、これはヨハネ福音書で弟子の一人にイエズス自身が答えた言葉の焼き直しでしかない。「フィリッポ、こんなに長い間いっしょにいるのに、わたしを知らないのか。わたしを見た者は父を見たのである」(ヨハネ14・9)。「受肉の神秘を信じる」ということは、このイエズスの言葉で説かれていることを信じることを意味してもいる。

ドイツの新約聖書学者G・ローフィンクは、サングラスの例を用いて興味ある説明をしている。神は、いわばサングラスをかけてわたしたちに対してのものではない。サングラスをかけると、人は何の遠慮も気恥ずかしさもおぼえることなくあらゆるものを見ることができ、他人の表情を眺めることができる。自分の目、したがって表情や気持ちは暗い色眼鏡の後ろに隠しており、相手からは見られる恐れがないからである。神はこのように己が顔を見せずに隠れたままで、「あなたがた自身をわたしに開きゆだねるように」と求めているわけではない。神は、イエズスにおいていわば「いつさいの仮面を脱ぎすてられ、ご自身の顔と表情をわたしたちに示された」のである。イエズスにおいてはじめて、わたしたちはいわば「素顔の神」と対するこ

とになる。

「イエズスにおいて神は、二度と追い越すことのできな
い『ことば』をわたしたちに語られたのであり、イエズスに
おいてご自身をわたしたちに決定的に結びつけられたので
す。イエズスにおいて神はご自身をわたしたちに渡された
のです」(ローフィンク、「素顔の神」)。

だからこそ、イエズスの言葉は神の言葉であり、イエズ
スのなすわざは神のわざなのである。イエズスが赦すとき
それは神の赦し、小さい者、貧しい者、罪人へのイエズス
のあわれみは神のあわれみ以外のなにもでもない。

わたしたちの信仰が、なぜイエズス・キリストへの信仰
に集約され、それを通してのみおん父へと向かいうるとい
われるのかも、同じ理由による。ただイエズス・キリスト
を信じることよってのみ、おん父へといたり、他の人や
ものへの信仰を経てではない、と教会が信じているのも、
この同じ理由に基づいている。

《素顔のわたしになることを……》

それだけではない。神はわたしたちに、神に全面的に己
を開き、全面的に委託することを求められるが、この「素
顔の神」を信じて受け取るときにのみ、そのことも了解さ
れよう。というのも、己が素顔をさらすことよってのみ

相手の素顔を求めることができるし、そんな相手に応える
ふさわしい仕方はただ一つ、自分もまた同じようにするこ
とだからである。

二、十字架の死をめぐつて

十字架の死を「受肉の神秘の頂点」と考える学者もいる。
たしかに、十字架の死はわたしたちの信仰の中でいつも中
心的なものとして受け止められてきた。と同時に、もつと
も大きな躓きの石でもあった。現代のわたしたちにばかり
ではなく、イエズスの弟子たちにとつてもそうであった。
救い主の死だけでも十分に衝撃的なことなのに、十字架
の死は、現代人には惨めで残酷な死と映るし、ユダヤ人に
はさらに「神に呪われた者の死」(申命21・23)と受け取られ
たからであろう。したがって、新約聖書の時代から、イエ
ズスの死を説明、解釈してこの躓きを乗り越えようとの試
みが種々なされてきた。ここでその歴史をたどることはで
きないし、主要な解釈すら取り上げる余裕はない。
聖書学と神学にもとづいて現代の教会が十字架の死に何
をみているかについて、二、三のことのみを結論だけ述べ
るとどめたい。

《イエズスの死は父なる神の望みか》

聖書に「おん父の望みでイエズスは死なれた」という意味のことが出てくるが、なぜおん父はあのような死を望まれたのか、と幾度も問われたことがある。多くの人がもつ素朴な疑問かもしれない。

この疑問の背後に、おん父がひとり子を人として遣わされたのは元来十字架上の死のためであった、という考えがあるのなら、それは誤りであろう。聖書のどこにもそんな考えはない。おん父の望みは、イエズスを人々が信じて受け入れること、したがってイエズスにおいておん父の救いを信じて受け入れることであつた。

ではなぜ現実に十字架の死に到るかといえば、イエズスはあくまでおん父から受けた使命を貫き通そうとし、人々は、そのイエズスをあくまで拒んだからである。イエズスの死は、人間の側の拒みの結実であつた。と同時にイエズスがおん父に従い通したことの具体的な結果でもあつた。神学者たちがイエズスの生涯とその結実としての死を、イエズスが子としてこの地上でおん父に示した「従順と奉獻の具体的姿」と意味づけるとおりである。子としての従順と奉獻が、父に対する子としての愛の具体的形であるなら、イエズスの愛が十字架の死の内容となる。

さらに、救いと解放をもたらす父の意志を人々に証し続けることが、おん父に対する愛であるとともに人々への愛であるといえるなら、十字架の死の内容はまた、わたしたちへのイエズスの愛ということにもなる。愛はいつも具体的に生きられた愛のみ、真実の愛となる。イエズスの生きた具体的状況では、イエズスの死という形でその愛が最終的な姿を現すのである。

《なぜ「十字架の」死か》

イエズスが告げ、行つたのは父なる神がどういふお方であり、何を望まれるのかについてであり、自分はその父の望みどおりに行う者だということをめぐるつていた。かつて旧約時代の預言者の場合、その真偽を識別するしとしては、ただその告げる神のことが実現するかどうか問題とされた。イエズスは単に崇高な教えや理想を語る人生の師ではなかつた。神の救いの時が始まつており、神はその愛と赦しを信じる人々にもたらしているのだという救いの訪れを説いた。預言者の場合以上に、ひとえにそれが現実になるか否かにその真偽はかかつている。もし、「神に呪われた者」の死を味わい、神の助けの介入がないならば、十字架の死はイエズスの一切が偽りであることを顕わにする。挫折を意味する。イエズスの十字架の死が含む特別な

開の一端をここからうかがえよう。

エダヤの指導者たちがイエズスを十字架の死においやることで賭けていたものは、結局、イエズスが告げる神が真実のものか、自分たちの支えとし力としてきた当時の神信仰が真実の神とその望みを表しているか、ということであったともいえる。

そして、十字架上からイエズスを助け出す神の介入はなかった。

聖書が、そして教会が、いつもイエズスの「死と復活」を一つの現実、一連の神秘の二側面として受けとり、伝えていく理由もここからいくらかうかがえよう。

三、「葬られ、復活して父の右におられる 主イエズス・キリストを信じる」

復活への信仰は「神とイエズス・キリストに対する信仰の要約であり、総括なのである」(W・カスパー)と言われる。すでにパウロも「キリストが復活しなかったのならわたしたちのしてきた宣教はむだであったし、あなたがたの信仰もむだなことになります」(Iコリント15・14)と言う。このことは今も少しも変わらない。

《復活ということの意味すること》

「復活」という表現で聖書や教会が意味していることは、簡単にまとめるのがむずかしい。明らかなのは「イエズスが生き返った」、つまりイエズスが死の時までと同じ生命に再び生き返った、という意味ではない。あえて言うなら、父なる神が、あのように生き、死んだナザレのイエズスを死の力の束縛から解き放ち、人類の救い主としてご自分と栄光を分かち合うべく受け入れられた」ということを意味している。こういう人間の経験を越え、神の生命、神の栄光の状態とかかわる現実を人間の言葉で描こうとすれば、常に不十分かつ比喩的にならざるをえない。

事実、新約聖書は「復活」を表すのにいろいろな表現を用いている。「イエズスは生きていく」(ルカ)、「父のもとに行く」(ヨハネ)、「上げられた」(ヨハネ・パウロ)、「栄光を受けた」(ヨハネ)等々、はその例であるが、次第に「復活」という表現におちついたにすぎない。

《復活信仰が含むもの》

それでは復活信仰でわたしたちは何を信じることになるのだろうか。要点のみ述べておこう。

(1) 復活を父なる神のわざとして聖書が語ることは、わたしたちがどんな神を信じるのかを教えてくれる。日々の生活でも死という限界の中でも、自分自身を抛り所として立つか、生と死を越えて新しい生命の力に満ちたお方を抛り所とするかを決断することになる。

(2) 復活は、おん父への従順と奉獻に生き、死んだイエズスとそのあり方の、おん父による承認であり受け入れである。イエズスが愛に生きたのなら、愛は必ず一致（受け入れ）において完成される。イエズスの証の眞実であったことの最終的な承認であるとともに、神への愛がどこを指し、イエズスを信じる者がどこに招かれているかの証である。

(3) イエズスは父なる神の愛を証し、自らのわたしたちへの愛を生きた。神学者たちは「他者のための存在」だったし、今もそうだと言う。そのイエズスの受け入れは、イエズスが証した父なる神のわたしたちへの愛と約束が不変の現実としてとどまることの宣言でもある。イエズスが今も「他者のための存在」としてわたしたちのためにおん父のもとにあることの宣言でもある。

(4) 復活の信仰は、死の意味を変えた。どんなに死が恐れと矛盾に満ちていても、死が最後の現実ではないし、自己のために生きることが最終の価値をもつものでもない。いのちこそ最終の現実であり、愛こそ最終的な価値をもつ。

この苦しみと争いと矛盾に満ちた世界にあつて、復活はわたしたちの希望の根拠となるのである。

(5) 聖書の証言によれば、復活の主の出現の場合、わたしたちと異なる性質のものではあるが、復活したイエズスの「体」に言及している。その解釈がどうであれ、次の二つの意味を含む。一つは、イエズスの魂だけではなく、イエズスという人格の全部が受け入れられたこと、いま一つは、人間存在の様式では「体」は人々と世界にかかわる場でもある以上、復活のイエズスは主キリストとして今なお世界とのかかわりを保っている、ということである。

(6) そしてそのことは、イエズスがもたらす救いは、グノーシスの考えとは異なり、「からだからの救い」「世界からの救い」でなく、「からだに於いての救い」「世界のなかでの救い」であることを語っている。

(7) 復活信仰は、「救いの道が拓かれた」のみでなく、「それを歩む力（聖霊）が与えられた」ことを告げている。

（たけやま・あきら 鹿児島教区司祭）